

# 修驗道の修行と思想

宮 家 準

## 一 修驗道と修行

修驗道は我国古来の山岳信仰が外来の仏教、道教、シャマニズムなどの影響のもとに、平安時代末頃になって一つの宗教体系を作りあげたものである。<sup>(1)</sup> この修驗道という名称は、神靈のすまう聖域とされる山岳に入つて修行することによつて、超自然的な驗力を修める道を意味している。修驗道の宗教者は驗力を修めた者という意味で修驗者と呼ばれた。また山中に伏して修行したことから山伏（山臥とも書く）、全国各地の靈山をまわつて修行したことから客僧とも呼ばれている。

修驗道の靈山は全国各地に散在するが、中央ではすでに奈良時代から大和の葛城山と吉野から熊野にのびる大峰山系が代表的な修驗道場として広く知られていた。なかでも大峰山は修驗道のメッカとして盛え、その入口にあたる吉野と熊野

には数多くの修驗者が集まつた。やがて鎌倉時代末期以降になると、熊野の修驗者は天台宗の聖護院を本山にいただいて、本山派と呼ばれる宗派を形成した。本山派では七世紀末頃の山岳修行者役小角を開祖に仮託し、山岳修行の方法を定め、教義をととのえていった。その教義は仏教とくに密教や天台本覚論の影響の強いものである。一方吉野側からは大和地方の諸寺の修驗者が峰入を行なつた。彼等は室町時代末期以降になると醍醐寺を開いた真言宗小野流の祖聖宝を派祖に仮託して当山派と呼ばれる宗派を形成した。そして江戸時代には、全国各地の修驗者ほとんどがこの本山派、当山派の両派に統轄されたのである。<sup>(2)</sup>

修驗道の眼目は上記の概説からもわかるように峰入と呼ばれる山中での修行である。修驗者はこの修行によつて、深い神秘体験をえ、さらに驗力を得たと確信した。そしてこの体験をもとにして、修行方法を定め、その意味づけをこころみ

た。また神秘体験そのものを、言語などを用いて表現するいとなみがなされていった。修驗道の思想はこうした峰入とそれによって得られる神秘体験の説明を中心としているのである。なおその説明にあたっては、修驗道の母胎をなす民俗宗教と、修驗集団自体がなれば寄生した仏教の影響が強く認められた。すなわち修驗道の教義では神秘体験を成仏のあかし

とし、峰中での修行をその方法及び階梯と把えている。ところが今一方こうした修行により、成仏した修驗者をむかえる里人は、彼らを「カミ」としてあがめたのである。すなわち、教義でとく峰入による成仏という思想は、修驗道もそれに包摂される民俗宗教の人がカミになる思想に位置づけて受けとめられているのである。そこで私もまず民俗宗教に見られる人がカミになる信仰を紹介して、それに修驗道の成仏論を位置づけて見ることにしたい。<sup>(3)</sup>

日本の民俗宗教では人間とカミは決して隔絶した存在ではなく、人間は何等かの儀礼をへることによって、カミになるとされている。その際大きく死後カミになるものと生前カミになるものとの二つに分ける事が出来る。このうち、死後カミになるものには、第一に静かに死をむかえ、子孫に葬儀、供養をしてもらい、三十三回忌または五十回忌のとむらいあげを受けて祖先神となっていくものである。こうした経緯によって正常な死をとげた日本人は誰れどもが祖先神になると

信じられているのである。これに対して、戦死、処刑、自殺など異常な死をとげた人は、自己をそうした状況に追い込んだ人に對して強い怨みを持って祟をする。しかし人々が丁重にまつると御靈神になるとされている、天満宮、神田明神、靖国神社などはいざれもこうした信仰にもとづくものである。

次に生前にカミとなるものの第一はきびしい修行によつて神秘体験のうちに、カミと一体となり、以後は「生神」として崇められる人である。この修行はしばしば擬死再生のモチイフでつらぬかれ、修行者は象徴的に死んだ上でカミとして再生しているのである。なお病気などの際に神秘体験をえて生神となるというように苦行をともなわないものもこの種類に含めておくことにしたい。いずれにしろ、ここでは神秘体験をえることが生神となる条件とされているのである。これに対しても、今一つ天皇に見られるように、大嘗祭をへて「現人神」となるものがある。これは、いわば特定の人を特殊な儀礼によつて聖化してカミとするものである。このように民俗宗教では死後他者によつて死体を処理され（葬儀）、供養や祭りを受けることによつて、あるいは生前に修行によつて神秘体験をえたり、特殊の儀礼を受けることによつて、いわば自ら生体を処理すればカミになりうるとされているのである。<sup>(4)</sup>

ツダガヤで悟りを開いたことにもとづいて煩惱を解脱して仏となることをさしている。そして仏教教義では成仏をめざす修道として、戒、定、慧の三学を定めたり、成仏迄の階梯、成仏を達成した時の境地などについて種々とかれている。ところが民間では死を成仏、死者を仏（様）と呼んでいる。これをさきに記したカミになる過程に位置づけていうと、一般的には、死後カミとなる道を歩みはじめる「成仏」といい、それからとむらいあげ、また御靈神としてまつられる迄の期間の先祖を「ホトケ」と呼んでいるようである。

さて、修驗道におけるカミやホトケとなる思想を、こうした民俗宗教や仏教の思想に位置づけて見ると、次のように整理することが出来る。まず大峰山などでは現在も登拝講の先達は登拝三十三回または五十回を記念して供養塔を建立している。これを行なった先達は死後山に帰つて（帰峰という）すぐカミとなるとされている。これは死後子孫によつて行なわれる三十三回忌を、いわば逆修として生前に行なうことによつて、死後ただちにカミとなることを確信するいとなみと考える事が出来る。なお木曾の御岳山や越後の八海山では物故した先達は靈神名を受け、山中に靈神碑を建立している。これなども先達が死後カミになるとの信仰にもとづくものである。これらはいわば正常な死をとげた修驗者が死後カミとなる事例である。これに対して火中や水中に捨身したり、土

中で入定して即身仏になつた修驗者は、死後ただちに靈力の強いカミまたは仏として人々の深い帰依をあつめている。<sup>(5)</sup>これはさきにあげた御靈神の信仰につらなると考えられるものである。

これらに対して、生前に苦行のうちに神秘体験をえてカミまたは仏になるという形態は、修驗道の峰入修行の基本的な考え方である。また峰中で授かる灌頂は、もともと印度における国王の即位式に淵源をもつ仏教の灌頂の影響を受けたものである。それ故灌頂を受けることによつて仏になるという思想は、天皇が大嘗祭をへて現人神になるという考えと共通の基盤にたつてゐるといえよう。もつとも修驗道の場合には峰入修行の最後に、灌頂が授けられ、それによつて成仏が完成するというように両者が密接に結びついている。そしてさきにも述べたように、この峰入修行をし、灌頂を授かって成仏するという形態が、修驗道の眼目をなしているのである。

そこで本小論では、こうした形態をとつていとなまれる修驗道の修行と思想を紹介することにしたい。その際この問題を、仏教一般の枠組の中に位置づけて、成仏の方法ともいえる三学、成仏の階梯、成仏によつて得られる悟りの内容との表現の順序で論をすすめることにする。

周知のように戒、定、慧の三学は成仏をめざす仏道修行者が必ずおさめねばならない三つの修行をさしている。その際一般には戒は身心の調整、定は心の統一、慧は智慧を得る修行とされている。<sup>(6)</sup> 修驗道においても、本山派修驗では代表的な教義書『修驗速証集』の冒頭に「無作三学之事」がおさめられていることからもわかるように、きわめて重視されている。また当山派修驗では、その法流を慧印法流と呼んでいるが、この慧は戒定慧の三学を示すとしている。<sup>(7)</sup> そしてその教義書『修驗心鑑鈔』では、人間の煩惱のもとは、貪、瞋、痴の三闇で、これを戒定慧の三学によつて打破しなければならないとし、三学のそれぞれについて

「謂<sup>ニ</sup>防<sup>ニ</sup>邪止<sup>ニ</sup>惡云<sup>ニ</sup>戒<sup>ニ</sup>息<sup>ニ</sup>慮離<sup>ニ</sup>緣云<sup>ニ</sup>定<sup>ニ</sup>破<sup>ニ</sup>惑証<sup>ニ</sup>真云<sup>ニ</sup>慧<sup>ニ</sup>」<sup>(8)</sup>

と説明している。そこで以下修驗道に於ける戒定慧のそれぞれについて紹介することにしたい。

### a 戒

戒は仏教では修行や入団にあたつて、課せられる戒めとされている。今見たように『修驗心鑑鈔』ではこれを邪を防ぎ悪を止めることをさすとしている。五來重氏は古代末以来の修驗道の修行の伝統は近世の木食行者に繼承されているとして、彼等の行動から次の十三の木食戒を推定されている。<sup>(1)</sup> 遊行回国と抖擗、<sup>(2)</sup> 木食行と断食行、<sup>(3)</sup> 劝進、<sup>(4)</sup> 作仏（仏

像・神像・千体仏・万体仏）、<sup>(5)</sup> 作歌、<sup>(6)</sup> 加持祈禱（呪術・呪文・真言・經典）、<sup>(7)</sup> 窟籠りと禪定、<sup>(8)</sup> 苦行と懺悔滅罪、<sup>(9)</sup> 島渡りと辺路修行、<sup>(10)</sup> 念仏・密教・法華經の併修、<sup>(11)</sup> 一心觀（唯心觀）、<sup>(12)</sup> 卽身成仏觀、<sup>(13)</sup> 入定と捨身がこれである。<sup>(9)</sup> 一見してわかるように、これは戒といふよりむしろ木食行者の活動形態を列記したと思えるものである。

これに対しても仏戒に近いものに、成賢（一一六二一一二三一）撰とされる『修驗得度作法』所収の殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒、食肉の六種の戒がある。もつとも本作法には、これらの戒とあわせて期せずして人を殺した時、祝事で杯を賜り酒を飲む時、淨肉を食する時には陀羅尼を唱えればその罰をまぬがれるとして戒とあわせて、それぞの際の陀羅尼があげられている。<sup>(10)</sup> また修驗道では妻帯を認めているわけであるから、邪淫も妻以外の女性に對してのことなのである。

こうしたことからわかるように、ここにあげられている戒は不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒の在俗仏教信者の為の五戒をもとにしているというものの、止むをえずこれを犯した時も陀羅尼をとなえる事によつてまぬがれうるというように軽いものになつてゐる。

もつとも、さらに修行を進めて、灌頂を受法する際には、よりきびしい戒が要求されたようで、室町時代末頃の『大峰修行灌頂式』には、三昧耶戒、遮難、円頓菩薩戒（十重禁戒・

四十八軽戒)、三聚淨戒、峰中制戒と多様な戒があげられている。またほぼ同じ頃の『葛城修行灌頂式』にも、三昧耶戒、遮難、円頓菩薩戒、峰中制戒があげられている。両者は「峰中制戒」の内容が一部相違し、『葛城修行灌頂式』に三聚淨戒が見られないことをのぞくとほぼ同様である。すなわち、まず両者ともに、三昧耶戒がなされている。この三昧耶戒は成仏の種性を断ぜず、菩提心を発して清淨戒を受けさせるもので、結縁灌頂の儀則をもつてこれに準ずるとしている。<sup>(11)</sup>次いで遮難によつて、父を殺す、母を殺す、仏身の血を出す、阿羅漢を殺す、和上を殺す、阿闍梨を殺す、和合僧を破るの七逆罪をおかしたことがあるかどうかが尋ねられる。

これをえると、今度は天台宗の円頓菩薩戒の十重禁戒、四十八軽戒、三聚淨戒が授けられる。十重禁戒は殺戒、盜戒、婬戒、妄語戒、酤酒戒、説四衆過戒、自讚毀他戒、憚惜加毀戒、瞋心不受悔戒、謗三宝戒で、この一つ一つを良くなもつようく求められる。四十八軽戒は四十八のより軽い罪をいましめる戒のことである。また大峰灌頂のみに見られる三聚淨戒は止惡の摂律戒、行善の摂善法戒、化他をするする饒益有情戒の三種である。これらはいずれも円頓菩薩戒と同様のものである。

これに対しても、次の「峰中制戒」は峰中の諸行事、諸事象を説明したものである。その内容は『大峰修行灌頂式』の場

合は、第一 先達同行等事（先達及び小木・閼伽水・採灯・宿食及び懺悔の修行を努めること）、第三 斎食事（木食・草衣の護法事）、第四 宿日数（峰入の所要日数）、第五 禅鬼（役行者の護法事）、第六 靈鳥（鳥頭巾の由来）、第七 嶮難事（捨身求菩提修行）、第八 灌頂深秘（煩惱を断じ菩薩の十地をこえて、即身成仏の覚位に達すること）から成つていて。<sup>(12)</sup>これに對して『葛城灌頂修行式』の峰中制戒は、第一 先達同行事（先達が大日如来である事）、第二 断食事、第三 斎食事、第四 嶮難、第五 灌頂（実相印を授く）、第六 当峰溢觴事（役行者伝）、第七 行所（葛城山中の廿八経塚）からなつていて。<sup>(13)</sup>

捨身求菩提、灌頂など五來重氏が木食戒とされたもののいくつかが認められるのである。

もつとも集団の峰入修行では、より細かな規則が必要とされたようで、室町時代末の「峰中壁書事」（本山派系）、『修驗十八箇条警策』などには、峰中で守るべき次の十八の捷<sup>(14)</sup>があげられている。

### 「峰中壁書事」「定」<sup>(14)</sup>

### 『修驗十八箇条警策』<sup>(15)</sup>

1 自身即仏の恩を忘れて他念

2 入峰昇進興法利生のことのむ事

を交える事

3 先達度衆に対し無礼を致す事

4 每日所定の諸役を緩怠する事

5 先達の嚴命にさからつて猥に深法を望む事

6 度衆等の意見に従わず私情をまじえる事

7 慈悲忍辱の行儀を忘れて瞋恚を発する事

8 放逸の行儀をして他から誘される事

9 床中で雑談を楽しむ事

10 物に触れて狂言戯笑雜言等事

11 床中で珠数をもむ事

12 先達度衆をはばからず高声で誦経事

13 先達度衆の定めた掟に違背する事

14 無益の事について争論する

みを望む事

3 朝暮の勤行を懈怠なく勤める事

4 四威儀を正し、罪障を懲悔し善行を為す事

5 峰入の道具や秘書を紛失しない事

6 『三十三通記』、『秘決』等に伝受の旨を守る事

7 未修行者に峰中の書籍等を見せぬ事

8 先達に随逐給仕し、その命に従う事

9 同峰同行者の間でも峰中の書籍は秘す事

10 行住坐臥を道心堅固に勤め、現身仏果の本懷をとげる事

11 同行者は心と志を齊しくして勤め、和合の事

12 智行道徳を尊び、俗姓の優劣は執らぬ事

13 無益の事で争論をしない事

14 新疎、好惡、長短を説かぬ

事

15 床中で睡眠し、大あくびをする事

16 草鞋を乱着の事

17 入峰の間未修行の者に通語する事

18 宿から六町以内の小木をとる事

19 駆相の時さしたる過失がないのに人を咎めぬ事

20 衣体の本式を守る事（人に謁する時は頭襟袈裟を着ける事など）

21 駆相の時さしたる過失がないのに人を咎めぬ事

22 衣体の本式を守る事（人に謁する時は頭襟袈裟を着ける事など）

これを見ると、全体としては「峰中制戒」ともいえるものであるが、その内容はきわめて多岐にわたっている。そこでこれを今少しまとめると、大凡

修行に専心勤める事（「定」2・4、「警策」1・2・3・10）

修行中威儀を正す事（「定」1・9・11・15・16・18、「警策」4・5・17）

先規や教えを守る事（「警策」6・15）

秘密保持（「定」17、「警策」7・9）

先達に従い和合する事（「定」3・5・6・7・8・10・12・13・14、「警策」8・11・12・13・14・16・18）

事

23 他宗に偏執したり、他宗の僧と交わらぬ事

24 自分の短慮を以て他者の智を判じない事

25 駆相の時さしたる過失がないのに人を咎めぬ事

26 駆相の時さしたる過失がないのに人を咎めぬ事

27 駆相の時さしたる過失がないのに人を咎めぬ事

また峰中の秘密を守ることが要求されている事が注目されよ。

う。

なおこの他に彦山の峰中での集団規約に「制徒十条」がある。これは(1)常に戒文を誦す事、(2)上を敬い下に親しみ懷恨の情を持たぬ事、(3)雑談謔笑せぬ事、(4)看病してくれる人は父母のように想う事、(5)客の接待をつつしむ事、(6)毎日食事前に掃除をする事、(7)衣服器物を放置しない事、(8)他人の履物をはかぬ事、(9)席を立つ時は書籍をおおう事、(10)常に清潔にたもつ事というものである。<sup>(16)</sup>このようにここではさらに具体的に峰中の集団規約が定められているのである。こうした資料から、峰入修行に関する修験道独自の戒はおそらく、上記の「定」「警策」「制徒十条」のような集団規約に類するもので、それが各修験集団ごとに定められていたと考えられるのである。

### b 定

定は仏教では精神を静め統一するいとなみをさしている。『修験心鑑鈔』では「息<sup>レ</sup>慮離<sup>レ</sup>縁<sup>レ</sup>」ことを定と呼んでいた。ここではこれを広義に解釈して、俗縁を離れ、雜念を去つて修行することをさすととらえておきたい。修験道ではその当初から俗界を離れて山中の洞窟などに籠つて修行がなされたいた。大峰山中の笙の窟、菊の窟、英彦山の四十八窟、羽黒山の阿古屋窟などはこの代表的な例である。修験者はこうし

た窟内で岩壁に対座して修行し、守護仏の幻影を見たのである。<sup>(17)</sup>こうしたこともあるってか、現在でも種々の形の窟修行が行なわれているのである。<sup>(18)</sup>

定は屢々禅定とも云われている。そして仏教では特に瞑想の方法を禅定と呼んでいるが、江戸時代末の『修験学則』に「修験ハツトメテ禪定ヲ修スベキナリ、是モ台門ノ常坐常行半行半座等ノ軌ニヨルベシ、月輪観、阿字観等ヲ修スルモヨシ、本宗古則ノ中ニ禪定ヲ修スベシト云コト。往々ニ見エタリ」

とあるように、修験道でも修行の方法としてこの禅定が重視されている。そして実際に「客」の字を観ずる字輪観<sup>(20)</sup> 山伏の伏字を観じその意味を思う伏字観、不淨観・慈悲観・因縁観・差別観・数息観からなる「五停心観」などの観法がなされていて<sup>(21)</sup>いた。もっとも修験道で禅定といった場合には、こうした観法をさすよりもむしろ峰入修行そのものをさしている。日光・富士・白山・立山の禅定、伯耆大山の弥山禅定などはいずれもこれである。そこで本項では、精神統一を求めてなされる峰中の修行全体を定と把えて、その内容を紹介し、意味を検討することにしたい。

峰中での修行は、さきの『大峰修行灌頂式』記載の先達、小木、闘伽、採灯、宿の五先達の名前から推測すると、集薪、汲水、護摩、宿での作法が主要なものであつたと考える事が出来る。なおこの五先達のうちの先達は、『三峰相承法

則密記』では峰先達と記されている故、峰中で四先達を統轄する役割をはたす者といえよう。<sup>(22)</sup> もっとも峰中の修行はこれだけに限定されるわけではなく『修驗修要秘決集』では

「入峰修行軌則者、皆是胎内班蓋、胎外正灌頂、生起闕伽、死滅採灯表示也」<sup>(23)</sup>

とされている。また『三峰相承法則密記』でも同様に「入峰者胎内外生起死滅之修行也」としたうえで、胎内は縁笈・班蓋・六大本具印・山臥の二字、胎外は山伏二字・床堅・正灌頂、<sup>(24)</sup> 生起は頭襟・闕伽水、死滅は小木・採灯であると説明している。このようにここでは、さきの闕伽や採灯の他に修行の為の衣体や班蓋作法、床堅、灌頂などの儀礼が紹介され、これらが胎内、胎外、生、死に充当されているのである。

この他、『修驗修要秘決集』では、入宿、業秤、穀断正灌頂、出成の四度灌頂が紹介されている。また床堅、小木、闕伽、灌頂の諸作法については、特にそれぞれの切紙が収録されている。<sup>(25)</sup> なお業秤は修行者が犯した罪の重さをはかる作法、床堅は修行者が金胎両峰の曼荼羅になぞらえられた床に座し、自身の腰・臍・心臓・額・頂に大日如来の五大を観じる觀法である。さてこの四度灌頂と床堅・小木・闕伽・灌頂の二種の峰中修行を比較して見ると、四度灌頂では全体として、峰中の宿に入つたうえで、罪業を量り、穀断（二十一日間）後灌頂を受けて出峰するという形がとられている。すな

わち餓悔滅罪し、穀断によつて心身を限界状況においこんだうえで、神秘体験を得させるというメカニズムがとられているのである。これに対して、床堅、小木、闕伽、灌頂の組みあわせのものは、まず床堅により、即身成仏の可能性を確信したうえで、煩惱を消滅し（小木）、仏種を生じさせ（闕伽）、最後に灌頂を受けることにより成仏を完成するというメカニズムをなしている。それ故、こちらはさきに五先達の役職から推測したものにより近いといえよう。

峰中の修行はさらに体系化されて、人間の成仏過程とも云える六道四聖の十界になぞらえられている。すなわち地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六道と、声聞・縁覚・菩薩・仏の四聖のそれに業秤・穀断・水断・相撲・餓悔・四諦・十二因縁・六波羅蜜・正灌頂の各修行を充当して、これをまとめて十界修行と呼んだのである。<sup>(26)</sup> これを見ると六道の修行は、まず俗世間で犯した罪の輕重をはかつたうえで、穀断、水断、相撲などで自己の身心をいためつけて衰弱させたうえで、餓悔のうちに神秘体験を得させ、それを動作で表現する（延年）というように、さきの例では業秤、穀断正灌頂の形式の餓悔滅罪型の修行がより精緻化したものと云えよう。

これに対して四聖に充当されている声聞、縁覚は小乗の二乗をさし、菩薩は大乗の六波羅蜜をこれにあて、最後の仏を灌頂を受けて即身即仏の境地に達するものとしている。それ

故六道修行が伝統的な修験の修行を彷彿とさせる実際的なものであるのに対し、四聖の修行は仏教の三乗に密教の灌頂を加えたようなもので、両者は範疇を異にしているとも思えるのである。<sup>(29)</sup> 事実『修験修要秘決集』などに於いても、六道

修行（六凡とも表現している）は、事の修行、懺悔滅罪の道場で、大悲代受苦、隨他方便の行儀であるとし、四聖の修行は理の修行で妙理不思議の内証をえるためのものと、いうように、両者を対比させている。またこの四聖は単に三乗を意味するだけでなく、如来の内証の境地を自覚証知せる一念諦理の観行であるとし、さらに、この両者をあわせて、事理不二を示すともとかれている。<sup>(30)</sup>

これに対して『三峰相承法則密記』所収の「十種所役」や『峰中十種修行作法』では、床堅、餓悔（人）、業秤（地獄）、水断（畜生）、閻伽、相撲（修羅）、延年（天）、小木、穀断（餓鬼）、正灌頂というように十種の修行を段階的に行なうことによつて、最後に神秘体験に達するようなくみ方がなされている。<sup>(31)</sup> すなわちここでは、まず即身成仏の理を悟つたうえで罪を懺悔し、その重さをはかり、水断、汲水、相撲、舞踊、小木採、穀断などの苦行によつて、身心を極限迄おいつめたうえで灌頂が授けられている。それ故、修験道の灌頂には、仏教の灌頂とは違つて、巫女の神つけや、シャマンの守護靈感得にも似たものがあるといえよう。なお教義の上では修験者は

この灌頂によつて生仏不二絶対の境地に入るとしているのである。<sup>(32)</sup>

### ● 慧

慧は仏教では悟りの智慧を得ることをさすとされているが、さきの『修験心鑑鈔』の説明では、惑を破つて真を証することを慧というととらえていた。また当山派の法流は慧印法流と呼ばれていた。この慧印法流は、さきに紹介した十界修行を中心とする本山派の峰中法流に対し、寺院での灌頂として近世期になつて当山派でまとめられたと思われるものである。<sup>(33)</sup> なお教義上は慧印は戒定慧の三学をさすとされた。しかしここでは慧印を字義通りに慧すなわち智慧をおさめる為の修行ととらえて、その中核をなす慧印灌頂の内容を紹介し、そこで如何なる智慧の獲得がめざされているかを考える事にしたい。

慧印灌頂は伝承のうえでは、当山派修験の始祖、聖宝が、役行者の導びきで竜樹菩薩から授かつた秘法を伝授することを目的として、昌泰三年（九〇〇）に吉野鳥栖の鳳閣寺で開壇したとされている。この灌頂は大祇師聖宝、中祇師觀賢、小祇師貞崇の手で行なわれた。その内容は、四月二十五日正午に参堂庭儀・午后四時柴灯護摩・夜滅罪灌頂（不動明王法によつて修行）、二十六日正午理趣三昧・夜覺悟灌頂（竜樹大師法）、

二十七日午后八時五部大乗經読經・夜半伝法灌頂（大日如來法）。同日昼夜結縁灌頂といふものであった。<sup>(34)</sup>そして以後この滅罪、覚悟、伝法の三灌頂と結縁灌頂が慧印灌頂の中核をなすようになったとされている。

この慧印灌頂は、全体としては「両部金胎を合わせて理智不二を開く、是れ即ち遍照如來三業本有即一の妙業也」<sup>(35)</sup>とされている。四つの灌頂のそれぞれは次のようなものである。まず第一の滅罪灌頂は、「垢穢の身に昼夜作業の業報沈入する因果を此法に依つて滅罪するためのものである。本尊は滅惡趣菩薩で、その修法では、まず小祇師が招罪印で受者の罪を招き、摧罪印でその罪を摧破し、業障除印で業障を除去し、成菩提心の印で菩提心を発し、最後に本尊除一切惡趣菩薩根本印を結んで「地獄門を打破して諸惡趣の業障を悉く皆消滅させる」と観じる所作がなされている。次の覚悟灌頂は、現在闇迷愚心の無明道にあることを覚悟し、無上正等の覺台に登ることをめざす修法とされている。本尊は竜樹菩薩である。その修法は受者を覺台にのぼらせる事によつて曼荼羅に入ったと観じさせ、ついで入門印信で仏菩提に入り、さらに合門生印言で如來の身と凡夫の心が自在に互に渉入したと観じ、さらに法界塔印などを結んで理智不二となつたと觀じるものである。

また第三の伝法灌頂は大日如來を本尊としてなされる本有

無作の秘術で、この法を受ければ自在無礙常住の樂を得るとされている。その内容は覺台にのぼつて、應身、報身、法身の三身の如來の秘印を受けて、理智不二を悟るというものである。なおこの滅罪、覚悟、伝法の三灌頂を受けることによって、三大阿僧祇劫をへて成仏しようとされている。これらに対し結縁灌頂は俗人に仏縁をむすばせるものである。修法の本尊は大日如來で、懺悔、三帰依などのあと胎藏界と金剛界の大日の秘印などがさしつけられている。このように慧印灌頂の中心をなす滅罪、覚悟、伝法の三灌頂では、受者の罪障を摧破し、三摩地に入つて菩提の芽をそだて、最終的には理智不二を悟るという形をとつていると考へることが出来るのである。

慧の修行によつて智慧を得ることの重要性は当山派修驗の教義書である『修驗心鑑鈔』の中でもたびたびべられてゐる。それによると

「修驗欲<sup>セ</sup>、修<sup>ニ</sup>行智慧<sup>セ</sup>、惡魔降伏<sup>セヨ</sup>。能惡魔降伏<sup>セヨ</sup>。魔者内魔外魔也。謂<sup>ニ</sup>六根六塵<sup>ニ</sup>無明為<sup>シ</sup>體矣。降伏<sup>シ</sup>者智慧為<sup>シ</sup>義<sup>セヨ</sup>」

というように、自己の眼、耳、鼻、舌、身、意の六根を穢す色、声、香、味、触、法の六塵を智慧によつてはらうことをするとしている。六根清淨は智慧を義とすることによつて達しうるとされているのである。そしてさらに、

「修驗者修<sup>ニ</sup>行智慧<sup>セ</sup>、照<sup>ニ</sup>了自性<sup>セ</sup>。自性<sup>ニ</sup>元來明而如<sup>レ</sup>照<sup>ニ</sup>鏡之像<sup>セ</sup>。智慧

者非<sub>ニ</sub>慮智分別、般若智。照了、觀照。自性、真空實相體。<sup>(38)</sup>

というように、智慧を修行するということは慮智分別に関する智慧を得ることを目的とするのではなく、むしろ自性を照了し、般若の智をえることをさすとしている。そしてこのよう

「修驗而得<sub>ニ</sub>般若。得<sub>ニ</sub>般若<sub>ニ</sub>故到<sub>ニ</sub>大道。修驗者修行之義也。得<sub>者</sub>照了也。般若者真空實相。謂<sub>ニ</sub>之大道。其體清淨無<sub>ニ</sub>塵勞<sub>ニ</sub>故大道」<sup>(39)</sup>というように、こうして得られる般若の智は、真空の実相で、その体は清淨であるとしている。これはいいかえれば、修驗道における慧の修行が基本的には神秘体験のうちに清淨感をあじわい、その中で空の理を悟ることを目指していると考えられるのである。

ところでこうした当山派の慧印法流とは別に、本山派の『修驗速証集』などでは、修驗者は修行することによって、無明を断じて大日如来の五智を得るとの見方があげられている。そしてこの五智のそれぞれは

「一法界体性智。謂三密差別數過<sub>ニ</sub>利塵。名<sub>ニ</sub>是法界。諸法所依故曰<sub>ニ</sub>體。法然不壞故名為<sub>レ</sub>性。決斷分別<sub>ナムハ</sub>以為<sub>レ</sub>智。二大円鏡智。謂自他三密無<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>邊際。名<sub>ニ</sub>是大。具足不<sub>ニ</sub>欠曰<sub>レ</sub>圓。實智高懸<sub>ニ</sub>万像影現喻<sub>ニ</sub>之鏡。三平等性智。謂性淨智水不<sub>ニ</sub>簡<sub>ニ</sub>性非性<sub>ニ</sub>故。彼此同如常住不變故名曰<sub>ニ</sub>平等性智。四妙觀察智。五眼高臨邪正不<sub>ニ</sub>謬。因以為<sub>レ</sub>名。五成所作智。謂二利應作故曰<sub>ニ</sub>所作。妙乘必遂成<sub>ニ</sub>之，稱<sub>也</sub>」<sup>(40)</sup>

法界體性智	中央大日	峰中大先達	四方
大圓鏡智	東方阿闍	小木先達	木
平等性智	南方寶生	柴燈先達	火
妙觀察智	西方阿彌陀	床先達	果
成所作智	北方釈迦	闕伽先達	水

との充當がなされているのである。そしてこの根拠を、東方は木を司るから小木先達、南方は火を司る故柴燈先達、西方は果の方位で笈実が果実を意味する故、笈をあずかる床先達、北方は水を司る故闕伽先達、中央は四方を兼ねる故峰中達、北方は水を司る故闕伽先達、中央は四方を兼ねる故峰中達にあてると説明している。またさらに修驗道独自の化他の修法である柴灯護摩についても、「斷<sub>ニ</sub>燒<sub>ニ</sub>漏<sub>ニ</sub>生死<sub>ニ</sub>依身<sub>ニ</sub>還<sub>ニ</sub>帰<sub>ニ</sub>本有<sub>ニ</sub>不生<sub>ニ</sub>阿字<sub>ニ</sub>。東方阿闍木以<sub>ニ</sub>西方彌陀金<sub>ニ</sub>一切<sub>ニ</sub>積<sub>ニ</sub>中央大日地<sub>ニ</sub>放<sub>ニ</sub>南方寶生火<sub>ニ</sub>悉<sub>ニ</sub>燒滅<sub>ニ</sub>洒<sub>ニ</sub>北方釈迦水<sub>ニ</sub>消滅<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>。」

字に入ることが説かれているのである。

### 三 成仏の階梯

成仏までの期間、その間にへる過程、さらに成仏をめざして行なう修行にともなう体験の深まりなどに関しては、修驗道でも種々の説明がこころみられている。そこで本項ではこうした問題をとりあげることにしたい。まず成仏の期間やその間にへる過程を、民俗宗教の影響が見られる身近かな事例から紹介すると、大峰山などで登拝者の先達が生前に三十三回または五十回の登拝をしたあとで、供養塔を建てる習俗をあげることが出来る。これは、生前に自分自身の供養をして、死後直ちにカミとなることを望むものである。それ故、ここでは三十三年あるいは五十年が成仏の期間と考えられているといえよう。

一方、生きながらカミになることを目指すきびしい峰入では、死の直前迄体を苦しめる苦行をしたり、死を象徴する儀礼を受けたうえで山に入っていた。現在大峰山の吉野側の入口にあたる金峰神社裏の蹶抜の塔でなされる登拝者の「氣を抜く」儀礼などは、身体から靈魂を抜き去ることによつて象徴的に殺しているとも思えるのである。<sup>(43)</sup>こうした見方をすると、吉野から山上ヶ岳の大峰山寺迄の修行道に設けられた、発心門(吉野山黒門上)、修行門(金峰神社の鳥居)、等覚門(山上

ヶ岳表行場お龜石上)、妙覺門(大峰山寺参道下)の四門が葬儀の際に棺を墓地に送る前になされる「四門ぐぐり」と類似している理由もわかるのである。<sup>(44)</sup>

なお羽黒山の秋の峰では、入峰者は葬儀を意味するといわれる笈からがきの儀礼を受けて入山している。また入山に際して黄金堂前で大先達が梵天をたおす儀礼がなされるが、これは性交を意味し、この行為によつて受胎した入峰者は、母胎になぞらえられた宿で修行した後に仏となつて再生するとされている。このように入峰者が一度象徴的に死んだうえで、受胎し、母胎になぞらえられた宿や山中で生育し(修行)、仏となつたうえで出生する(出峰する)とされていることもある。つて、羽黒山の秋の峰の期間は本来は十箇月間(現在は一週間)とされていた。受胎から誕生までの期間が成仏迄の期間とされているのである。

これと同様の信仰はかつては大峰山でも認められた。すなわち、大峰山中の秘伝をまとめた『峰中秘伝』には第一表に示したように、成仏への階梯を胎内の九ヶ月の生育に比定した伝承が収録されている。<sup>(45)</sup>これを見ると、まず大峰山の山上ヶ岳近くでなされる九ヶ月のそれぞれの修行の場所と本尊があげられている。そしてこの九ヶ月が母胎内の胎児の成長になぞらえられ、最後は五大六根六歳六境界をすべて具足して出生するとされている。そしてさらに本書では、この

第一表 大峰修行と胎内での仏種の成長

月	九 穴	守 護 神	修 行	身 体	成 長 の 階 梯
一ヶ月目	左 の 目	梵天王の垂迹不動尊	子守、勝手で修行 日天子、十一面	父母の姪が 和合	混沌未分から大円鏡智に向う く、善惡の分別なし
二ヶ月目	右 の 目	帝釈天の垂迹愛染明王			
三ヶ月目	右の鼻の穴	炎魔法王の垂迹軍荼利夜叉			
四ヶ月目	右の鼻の穴	四大天王の垂迹大威德無量			
五ヶ月目	口 穴	十二神垂迹不動明王	鐘掛、西の除一体の行 寿仏決定五如来	六根と皮肉 がととのう が決る	男女の姿が 人体となる 聞法開悟し、善惡心が生じる。
六ヶ月目	左 耳 穴	八大金剛童子の垂迹聖天	洞川の行事 胎藏界大日	人形がとと のう	一切の物を分別する。 大三千世間を見聞し、過去、現 在、未来を知る
七ヶ月目	右 耳 穴	大歳神の垂迹大荒神	節の行事、 弁財天、吒枳尼天、大黒天	手足の動き が自由に	中台八葉の人体を具足
八ヶ月目	尻 穴 <sup>(46)</sup>	二十八部衆、千手、馬頭	阿古滻の事 神通寺滝行事 愛染明王、金剛大日	皮、肉、筋、 のう 血道がとと	六根、九穴、皆自在の心を持つ
九ヶ月目	尻 穴 <sup>(46)</sup>	天の二十八宿、刀八毘沙門天王	稻村嶽行事 地三十六禽、天輪王、天三十番神	五大、六根、六歳、六境界すべ て具足	五大、六根、六歳、六境界すべ て出生
シ <sup>(47)</sup>					

ことは、

「我等生ル時ハ八葉心蓮 阿字本不生、本地五十二位の阿字ヲ生 　 というように、天台教学で成仏に到る修行の階位とされる五

十二位をへて、大日如来そのものとして出生すると説明しているのである。このように修驗道では峰入の期間を胎児の母胎内での成長の期間にあわせ、これが成仏迄の期間で、この間に成仏に必要な階梯がふみおこなわれるとしているのである。

ところで天台教学で菩薩が成仏する迄の階梯とされる五十二位あるいは四十二位は、さきの『峰中秘伝』の引用にも見られたように、修驗道にも導入されている。すなわち『修驗宗法具秘決精註』卷下には四十二位を構成する十住、十行、十回向、十地、等覚、妙覺のそれぞれが詳細に紹介されている。<sup>48</sup>もつともその最後に、前四十位は応身、等覚は報身、妙覺は法身にあたるとしたうえで、

「修驗行者開<sub>49</sub>十界一如凡聖不二眼。則四十二位接<sub>50</sub>三身即一位究竟円満」<sup>51</sup>

ととらえていた。つまり修驗者が、十界一如凡聖不二の眼を開けば、ただちに四十二位をへて、三身即一の境地に入りうるとしているのである。なお『彦山修驗道秘決灌頂卷』では、四十二位の成立の根拠を

「四十二菩薩欲触愛慢四煩惱各具<sub>52</sub>十界<sub>53</sub>合四十也。此四十又入<sub>54</sub>加我等色心二法<sub>55</sub>四十二也。色心二法亦成<sub>56</sub>等覚妙覺。此四十二転成<sub>57</sub>四十二位<sub>58</sub>也」<sup>59</sup>

と説明している。このように、この二つの書物では、十界一

如、凡聖不二、あるいは、煩惱即菩提の理を知る事によつて、ただちに四十二位の階梯をへて成仏しようと抱えているのである。

けれども天台教学では成仏までには、三大阿僧祇劫を要するとしている。そしてこれを菩薩の五十二位に充当した場合には、最初の十信から十住・十行・十廻向迄の四十位が第一劫、次の十地のうちの、勸喜・離垢・發光・焰慧・極難勝・現前・遠行迄の七地が第二劫、不動・善慧・法雲の三地が第三劫にあたり、これらすべてをへて、等覚、妙覺をおえたうえで、正覚に達しうるとしているのである。これに対しても密教では第一劫は我執、第二劫は法執、第三劫は無明の惑で、この三妄執を阿字不生の一念によって断することによって、一念のうちに三大阿僧祇劫をこえて即身成仏しうるとしているのである。

修驗道でもこの三大阿僧祇劫をへて成仏するとの思想は導入されている。ただその際、修驗道では多くの場合は、春峰・秋峰・夏峰の三峰修行をおえることによつて一僧祇となり第一劫、六峰修行により二僧祇となつて第二劫、九峰修行により三僧祇となつて第三劫をへて成仏しうるとといつて、順調にいけば三年間で成仏が可能とされているのである。なおこの三峰修行のそれぞれは、春の峰は熊野から吉野への峰入で順峰・胎藏界の峰・従因至果の峰、秋の峰は吉野

から熊野への峰入で逆峰・金剛界の峰・従果向因の峰、夏の峰は金峰山で行なわれる順逆不二の峰入で金胎不二・非因非果の峰とされている。それ故、教義的にいえば、胎・金・胎金不二、または従因至果・従果向因・非因非果をへることが一劫をおえる事とされているのである。<sup>(51)</sup>

なお当山派の慧印法流では、さきにもふれたように滅罪灌頂により第一劫、覚悟灌頂で第二劫、伝法灌頂により法身・応身・報身の三身の秘印を受けることによつて第三劫をおえて成仏し得るとされていた。また彦山では熊野本宮証誠殿（彦山法体巌）修行を初劫、新宮等覚殿（彦山俗体巌）修行を第二劫、那智飛滝殿（彦山女体巌）修行を第三劫にあて、このそれについて、初劫は菩提を因となす従因至果の位、第二劫は大悲を以つて根本となす従果向因の位、第三劫は方便を以つて究極となす因果一体の修行と説明している。そしてこの三者をへることによつて成仏しうるとといつてるのである。<sup>(52)</sup> なおこの他、峰中で採灯護摩の散杖作法などの際に両手を組んで、腰をひねりながら三歩ずつ三回直進する作法「一致」を三大阿僧祇劫をへて毗盧の覚位に入ることを示すとの説明もなされている。<sup>(53)</sup> このように修験道に於いては、峰入修行、峰中の作法、灌頂など具体的な儀礼を三つへることによつて三大阿僧祇劫をへて成仏しうるというように、きわめて具体的な説明がなされているのである。

さて次に成仏をめざして行なう修行にともなう体験の深化をとりあげる事にしたい。こうした修行による意識の変化は一般には神秘階梯と呼ばれ、諸宗教における神秘階梯の研究が進められている。岸本英夫氏はこうした諸宗教の事例をまとめて、神秘階梯の基本型を覚醒、浄化、光耀、融合、恒一の五つの段階に分けられている。そして第一の覚醒は神秘体験の世界に目覚める段階、第二の浄化は自己を清め修行に入つていく段階、第三の光耀は心が純一明澄になり佳美や歓喜がひらける段階、第四の融合は折にふれて比較的、短期間の神秘体験をえること、第五の恒一は不斷に融合の歓喜が満たされる段階と抑えられている。

そしてさらに同氏はハイラーの説にもとづいて、戒、定、慧の三学も一系の神秘階梯ととらえうるとし、上記の五段階に位置づける。戒は浄化、定は光耀と融合の一部、慧は融合の一部と恒一に位置づけうるとされている。<sup>(54)</sup> もし三学をこうした神秘階梯に位置づけて解しうるとするならば、修験道の修行の場合には戒は覚醒と浄化の一部、定は光耀と融合の一部、慧は融合の一部と恒一ととらえることが出来る。

なお天台宗でいう正因（万物に本来そなわる真如の理）・了因（理を照らす智慧）・縁因（智慧をおこす縁となる善行）の三因仏性、密教でいう理具（仮性を具有すること）・加持（一時的に仮と入我我入となること）・顯得（無相の三密）の三種の即身成仏は、

こうした神秘階梯を思想的に表現したと考えられるものである。この影響もあってか、修驗道でもこれに準じて、即身成仏・即身即仏、即身即身の三種の成仏をたててている。このうち最初の即身成仏は、成仏の理を知り、修行に入ることすなわち、天台でいう始覚で、春の峰入がこれにあたる。次に第二の即身即仏は修驗者の三業と仏の三密が互入し、入我我入の状態に入ること、すなわち本覚で、秋の峰入がこれにあたるとする。そしてこの両者は「いざれも生仏対弁、始本偏理」の顯教のとらえ方であるのに対して、修驗道の成仏の本義は最後の即身即身にあるとして、その内容を、

〔即身即身所談、當道不共極理也。<sup>ナリ</sup>此所不動性得本分頓桟、唯是常境無相。常智無縁、內証也。然<sup>レバ</sup>則造次顛沛、即無作三身之直体也。<sup>ナリ</sup>語默動靜亦是無相三密妙用也、實是修驗即座正覺。當位仏果源底也<sup>〔56〕</sup>〕

と説明している。これを見ると、即身即身は、修行者が、そ

の身そのまま仏となつた状態で、その身体はそのまま三身であり、その動作はすべて仏の三密で、両者は全く区別のない無作の状態になつた境地とされているのである。

このように修驗道の成仏論に見られる神秘階梯では、修驗者が自分は仮性を持つ故成仏しうとの理を知る即身成仏、修行の結果仏と修行者が入我我入となり、一時的に一体感をあじわう即身即仏さらにこれがすすんで生仏が全くのへだて

がなく、完全な一者になりおえた即身即身にと進んでいくと把える事が出来るのである。なおこれをさきの神秘階梯の五段階に位置づけると、即身成仏は覺醒、即身即仏は融合、即身即身は恒一に充当しうるといえよう。

#### 四 悅りの内容とその表現

修驗道の修行の目的はこれ迄述べてきたように現世において、戒、定、慧の三學をおさめ、三大阿僧祇劫をへて成仏を達成することにあつた。その成仏は即身成仏の理をさとり、一時的に即身即仏になることからさらに仏と不二の境地すなわち即身即身に入るものとされていた。ところでこうした境地に到達すると、当然その境地を何等かの形で表現し、さらにその境地にてらしてこれまで自分がへてきた戒定慧などの修行を見なおすいとなみがなされてくる。そこで次にはこうした問題をとりあげてみることにしたい。

まず、修驗者がそのまま仏、とくに宇宙を象徴する大日如来と一体のものであるということは『修驗三十三通記』に「夫山伏者大日遍照智身、凡身即仏覺體也<sup>〔57〕</sup>」とあるのをはじめ、種々の教義書で強調されている。このように修驗者が大日如来と同体であるということは、密教的にいえば、そのあらわれである諸仏諸尊とも同一の存在ということにならざるを得ない。

身とされる不動明王が本尊とされたこともあるて、「不動即我、我即不動 本尊与<sup>レ</sup>我、不二<sup>ニ</sup>心也」<sup>(58)</sup> というように不動明王と不二の境地にあることが強調されたのである。さらに神道とも関係を持つて民間に浸透した修驗道では「千早振ル神ノ社ハ我身ニテ 出入ノ息ハ外宮、内宮」<sup>(59)</sup> というように修行の結果自分自身が神と不二の境地に入ったとの主張すらなされているのである。

宇宙そのものを象徴する大日如来との同化体験は、人間には本来、こうした仏さるに宇宙の要素や働きのすべてが内在するとの思想にと展開する。すなわちまず修驗者が本来仏身であるということについて『修驗三十三通記』には

「(修驗行者) 自身即無作三身覚体。自身即一念法界内証也。故

我色心即仏体可<sup>ニ</sup>用心<sup>(60)</sup>

と記されている。修驗の行者は本来法身、報身、應身の三身そのもので、自身即一念法界の心に立って他を思んばかるといふように、その色心が即仏体であるとされているのである。なお本書にはさらにこの無作三身について、

「夫修驗所談無作三身者。本来即仏故云<sup>ニ</sup>無作三身。凡道理者。一切衆生色心万法己<sup>ニ</sup>法體<sup>ニ</sup>、本来無<sup>ニ</sup>僻<sup>ニ</sup>、周<sup>ニ</sup>遍法界<sup>ニ</sup>常住不变也。是為<sup>ニ</sup>法身。次彼法身當體己<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>本覺顯照德<sup>ニ</sup>了了分明也。是為<sup>ニ</sup>報身。次彼報身當體色心万法己<sup>ニ</sup>自然施<sup>ニ</sup>其德用<sup>ニ</sup>、謂天普覆<sup>ニ</sup>地遍載<sup>ニ</sup>。水濕<sup>ニ</sup>万物<sup>ニ</sup>、風生<sup>ニ</sup>万物<sup>ニ</sup>、火燒<sup>ニ</sup>万物<sup>ニ</sup>、食止<sup>ニ</sup>飢等皆是無作之

応用也。十界依正色心ニ法不<sup>レ</sup>動ニ當位<sup>ニ</sup>無作<sup>ニ</sup>三身也。風吟<sup>ニ</sup>樹頭<sup>ニ</sup>波打<sup>ニ</sup>沙石<sup>ニ</sup>、法界<sup>ニ</sup>音声即是無作三身說法也<sup>(61)</sup>

と記されている。衆生の色心が常住不变の法体である事が法身、その法身が本覺を顯照させていることが報身、その報身の当体が自然にその徳を施していることが應身であるとしているのである。そしてさらに万物はそのままで無作三身そのものであり、風、波をはじめあらゆる音声はこの無作三身の説法であると把えられている。

大日如来との恒一の感覚は單に行者だけでなく、万人が大日如来に象徴される宇宙の体相用である、六大四曼三密を所持しているとの思想を生み出している。『修驗三十三通記』ではこのことを

「一切衆生心色全<sup>ニ</sup>是六大四曼三密<sup>ニ</sup>体性也。凡聖同一<sup>ニ</sup>而無<sup>ニ</sup>毫髮<sup>ニ</sup>隔<sup>ニ</sup>。覺<sup>ニ</sup>此理<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>成仏。迷<sup>ニ</sup>此理<sup>ニ</sup>号<sup>ニ</sup>凡夫<sup>ニ</sup>」<sup>(62)</sup>

と表現している。また『修驗修要秘決集』では「修驗行者、性者兩部不<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>仏心也」<sup>(63)</sup> と説明されている。さらにこの宇宙との一体観は、

「夫山伏者。十界具足姿。十界始<sup>ニ</sup>從<sup>ニ</sup>地獄<sup>ニ</sup>終<sup>ニ</sup>至<sup>ニ</sup>佛界<sup>ニ</sup>。是故十界不動。迷悟不<sup>ニ</sup>。即身成仏形也<sup>(64)</sup>」

とくに、山伏を迷界の地獄からはじまって悟界の佛界に到る十界を一身のうちに具足した十界不動、迷悟不<sup>ニ</sup>、即身成仏の存在とする解釈すら生み出している。

ところで、以上の大日如来（宇宙）との恒一体験の思想的表現を見ると、修驗者さらには人間が、仏（宇宙）そのもの。その体相用・十界を本来一身のうちに具有しているという記述と並んで「凡聖不二」「迷悟不二」「両部不二」「理智不二」「始本不二」「順逆不二」というように「不二」という表現が屢々なされている事が注目される。

この不二は本来は凡聖不二、迷悟不二というように、迷いを持つた俗なる凡夫が仏などの悟りをひらいた聖なる存在と融合し、さらに恒一するというように、一体不二の境地に入ることを示したものと考える事が出来る。しかしながら単にこれだけに留まらず、金剛界と胎藏界の両者が不二であることを示す「両部不二」・「理智不二」、始覚と本覚の不二を示す「始本不二」、順峰・逆峰の両者の不二をとく「順逆不二」などもあげられている。

このことは、神秘体験に於いて、修行者と仏という二元対立が、凡聖不二、迷悟不二という形で融合、恒一し「一なるもの」となった結果、すべてのものに関しても二元対立を超克した不二絶対の世界を求めようとするにいたつたことを示しているとも思えるのである。周知のようにこうした二元相対の現実を越えた不二絶対の世界は、天台本覚思想の中核をなすものである。

実の相（現象界）と、不变常住の永遠の相（本質界）から成っているとする。そしてこの両者を仮と実、俗と真、事と理、生滅門と真如門など種々の言葉で表現する。そのうえで現象界の諸事象には本来永遠不変の本質的なものが内在するとの思想をといていく。真俗一如、事理俱融などはこうした考えもとづいている。これを人間と崇拜対象との関係でとらえると、凡聖不二、神人不二、即身即仏ということになる。そしてこのことを悟り、修行の結果この境地に達するのが始覚で、本来人間はそのまで仏であるとするのが本覚、さらにこの両者の区別をも超克した状態を始本不二、と把えてい(65)る。ちなみに修驗道における神秘階梯ともいえる即身成仏（始覚）、即身即仏（本覚）の段階をへて到達した即身即身は、こうした始本不二の境地とされているのである。

ところでこうした絶対不二の体験は、言語によつてはなかなか表明しがたく、その理解も困難である。そのこともあって、修驗道では、この体験を文章によつて表現するのみでなく、文字、イコン、儀礼などにてらして説明するところみがなされている。そこで以下これらについて代表的な切紙をもとにして、簡単にふれておくことにしたい。

まず文字に託して絶対不二の体験を表明した代表的な切紙には「四種名義事」と「山伏二字之事」がある(67)。このうち「四種名義事」は、修驗道の宗教者を示す山伏、山臥、修

天台本覚思想では、基本的には人間存在は変化生滅する現

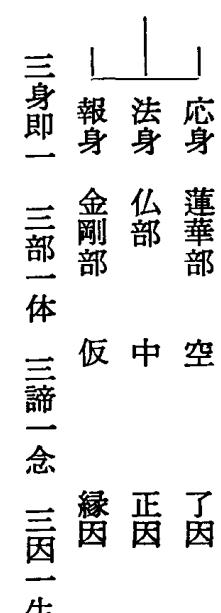
験、客僧の四種の名義に託して、不二の思想を説明したものである。これによると第二表に示すよう

## 第二章 四種の名義

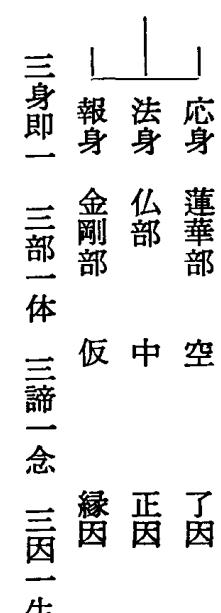
修生		従因至果		始覚		修		修験		客僧	
山伏	本有	従果向因	本覚	相対	始本	双修	始本	始本不二	執着しない		

山伏は修生・従因至果・始覚を意味し、山臥は、本有・従果向因・本覚をあらわしている。このように同音異義のこの二つの文字は、始本相対を示しているのである。一方修験は山伏が旨とする山での修行と里での験力の行使という二面の宗教活動を示す名称であるが、この修は始覚、験は本覚で、この両者を必須とする故、あわせて始本双修を示すという。これに対して客僧は修験者が一切のこととらわれず一所不住の生活をしていることをさす言葉故、一切のものに執着しない始本不二を示すという。このように「四種名義事」では、山伏、山臥、修験、客僧の四種の名義に託して、始覚・本覚（始本相対）・始本双修、始本不二の思想がとかれているのである。

一方次の「山伏二字之事」では、上記の四つの名義の中では、もっとも広く知られている山伏の「山」と「伏」の字画



に託して、不二やすべてを「一なるもの」に帰する体験が表明されている。まず「伏」の方から紹介すると、「伏」の左の「人」偏は法性・菩提・聖を、右の「犬」の字は、無明として無明法性不二・煩惱即菩提・凡聖不二の境地をさすと把えている。一方山の字は縦の三画と横の一画からなるが、この縦の三画は次のように、三身、三部、三諦、三因のそれ



ぞれを示し、これが横の一画で結ばれることによって、三身即一、三部一体、三諦一念、三因一生をあらわすとされている。それ故「山伏」の二字は、全体として、無明法性不二・煩惱即菩提・凡聖不二の境地に入り、自己の一身のうちに三身即一・三部一体・三諦一念・三因一生の理を体得することを示しているのである。山伏は自分たちは修行の結果こうした境地に達したのだと自己主張したのである。なお『彦山修験道秘決灌頂卷』では山の字の縦の三画を戒定慧の三字に充當し、横の一画でこれらがむすばれているのは、三学併修を示すとしている事を付言しておきたい。<sup>(68)</sup>

次に絶対不二の体験のイコンによる説明の事例をとりあげ

ることにしたい。この代表的なものは、切紙「三身山伏之事」と「衣体十二通」である。このうち「三身山伏之事」は長髪、摘髪、剃髪という山伏に見られる三種の髪形に託して、修驗者が無作三身であることを説明したものである。すなわち長髪の下山伏は十界互具の法身、一寸八分に髪を摘んだ摘山伏は胎藏界九尊・金剛界の九会（計十八）を兼ねそなえた報身、一般僧侶と同様に剃髪した剃山伏は三乘同具、隨類應現の応身をさし、この三種の髪形が全体として山伏が無作三身であることを示すと説明されている。<sup>69)</sup>ここでは山伏の身体そのものが無作三身であることが髪形に託して説明されているのである。

修驗者が身体につけている山伏十二道具と通称される衣体は

「山伏衣体者初自<sub>ニ</sub>頭襟<sub>ニ</sub>終至<sub>ニ</sub>脚半<sub>ニ</sub>一々皆願<sub>ニ</sub>自身是仏法体。故論<sub>ニ</sub>其衣体一事互相為<sub>レ</sub>令<sub>ニ</sub>契<sub>ニ</sub>當其深義<sub>ニ</sub>也」<sup>70)</sup>

というようにしてが、自身是仏法体である事を示し、さらにこの衣体について論じることは、其深義に人々をむすびつけるものとされている。これをさらに敷衍すれば、衣体そのものが修驗者の自内証の即身即身、不二の体験を示していると考へられるのである。そのこともあってか、修驗道の教義はこの衣体の象徴的意味づけを主要なものとしているのである。ただしここでは、個々の衣体の意味を紹介するいとまが

ないので、そこに見られる不二の思想のみをとりあげることにしたい。<sup>71)</sup>

まず十二道具のそれぞれ眺めると、頭巾は額にいだく故五智の宝冠、黒色は無明、円形は五智円満、十二のひだは十二因縁、總じて凡聖不二。班蓋は母胎のえなでその円形は金剛界月輪、頂上の八葉は胎藏界八葉、あわせて金胎一如。鈴掛衣は上九布は金剛界、下八布は胎藏界、両者あわせて金胎一如。結袈裟は九条袈裟の形をとっているが、それを山伏が掛けることにより十界一如、その形が山型となる故三身即一。法螺は金剛界一字の智体で、貝緒は臍の緒（胎藏界）ゆえ、両者で金胎一如。最多角念珠はその珠の形が劍型であるのは智劍、珠数が百八なのは百八煩惱ゆえ、煩惱即菩提。錫杖は須弥山をあらわす上部の六輪が六波羅蜜、柄の六角が六道の衆生で、煩惱即菩提。笈は胎藏界で理、肩箱は金剛界で智、笈のうえに肩箱をのせるゆえ両者で理智不二。金剛杖は上部の劍頭が金剛界、下部の四角が胎藏界ゆえ金胎不二。引敷は無明を示す獅子皮に法性をえた修驗者が坐るゆえ凡聖不二。脚半は春峰の脚半が胎藏界、秋の峰のそれが金剛界ゆえあわせて胎金不二というようにすべてにわたって不二の思想が認められるのである。<sup>72)</sup>

そこで次にこれらを不二となるもの別に分類すると、金胎一如は班蓋・鈴掛・金剛杖・脚半、理智不二が笈と肩箱、凡

聖不二が頭巾・引敷。煩惱即菩提が念珠・錫杖。三身即一・十界一如が結袈裟によつて表明されている。これを見ると頭にいだく頭巾が凡聖不二、錫杖が金胎一致、結袈裟が三身即一・十界一如、笈と肩箱が理智不二、念珠と錫杖が煩惱即菩提というようになつて、主要な法具によつて凡聖不二、金胎一致、三身即一、十界一如、理智不二、煩惱即菩提が示されているのである。それ故これらのが衣体に託して語られている代表的な不二の世界であると把えておきたい。

儀礼に於いては、成仏迄の期間とされた三大阿僧祇劫の算定基準となつた三峰修行の意味づけが注目される。すなわち『修驗修要秘決集』によると、春、秋、夏の三峰のそれぞれに第三表のような意味づけがなされている。<sup>73)</sup>

第三表 三峰修行の意味

夏峰	秋峰	春峰
順逆	逆峰	順峰
不二	胎金	胎藏界
非果	向因	従因
無行	法性	無明
不二	色心	色
和合		地
ウン	バン	ア
不二	事理	事
始本		始覺
不二	本覚	本覺

これを見ると、胎藏界の春の峰と金剛界の秋の峰の両者を不二にしたものとして夏峰がとらえられ、これを胎金不二、順逆不二、非因非果、無言無行、色心不二と説明している。な

お本覚思想では従因至果を始覺・事、従果向因を本覺・理とする見方がある故<sup>47)</sup>、これを充當すると、夏峰を始本不二、事理不二と把えることも出来るのである。それ故これらも含めて、胎金不二、順逆不二、非因非果、無言無行、色心不二、始本不二、事理不二を峰入に託してとかれた不二の世界と考へる事にしたい。

さて以上私は字義、衣体、峰入などに見られる不二について紹介したので、次にはこの主要なものをとりあげて、その根底にひそむ思想を検討することにしたい。まず最も多く見られた金胎不二について、『修練秘要義』では、金剛界を智・識大・遮情・始覺・従因至果・果曼荼羅、胎藏界を理・前五大・表徳・本覺・従果向因・因曼荼羅としたうえで、

「不二」者自他門所伝各別也。他門安然兩部各々云有不二。又慈覺大師兩部外立不二。今大師所伝不然。則二云不二。二外無一。兩部各非有不二。又兩部外非有不二。一則云而二。甚深難解。可思之。云云<sup>75)</sup>

と記している。きわめて難解な文章であるが、大師に仮託して、両部が不二であるのではなく、また両部の外に不二があるわけでもない。本来「一」なるものがあり、それが「二」と云われているにすぎないと述べていると解しておきたい。なお『修驗修要秘決集』に、「修驗行者、自性者、兩部不二、仏心也」<sup>76)</sup>と述べられているように修驗者の自性体そのものが金胎

不二と抱えられているのである。

金胎不二は胎蔵界が理、金剛界が智とされている故理智不二と云いかえる事が出来る。この理智不二の思想は、当山派修驗では特に重視され、聖宝が鳥栖で慧印灌頂を開檀した時に作ったといわれる『理智不二界会礼讚』が伝えられてゐる。そこでは理智不二について

「理智不二。本性清浄故。遠離諸戯論。遠離諸戯論故。理智不二。自性寂靜。其性寂靜故。其性自性清浄。理智不二。自性清浄故。菩提性自性。理智不二之理上者。五蘊性相空。五蘊性相空故。六

根性相空<sup>(77)</sup>」

と記されている。これを見ると理智不二は本来清浄なものとされ、それ故諸戯論をさけるならば、理智不二そのものである修行者の自性も寂靜となる。これは修行者の五蘊さらには六根が空であることによるとといっているのである。

修行者はこのように自性のうちに金胎不二、理智不二を観じるのみでなく

「如來ノ三密ト衆生ノ三業ト全ク差別ノ相無シ 本来清浄ニ而不ニ相違ニ周遍法界ノ故ニ無相三密ト云。然レハ即チ拳手動足舌相言語ハ法爾無作ノ印明也<sup>(78)</sup>」

というようく、その根底に清浄感を持つ無相三密の境地にあるのである。なお峰中の作法では、この無相の三密を、身密は床堅并十界本有印、語密を十界本有の明、意密を柱源とし、

これらによつて自心を養うことをさすとしている。<sup>(79)</sup>

この他では本覺論でいう一心三觀や無作三身ともむすびつけて、不二の世界が説かれてゐる。すなわちまず一心三觀に類するものには、三諦一念の思想がある。これは、

「三諦一念者。行者上<sup>ハ</sup>即三諦具足也。謂一念心<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>色質<sup>ニ</sup>空也。然一切慮相起<sup>ハ</sup>仮也。有無共一心<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>離中也。是<sup>云ニ</sup>一念三諦<sup>也</sup>」<sup>(80)</sup>

といふものである。ここでは行者の一念の上に空仮中の三諦具足が観じられてゐると抱える事が出来る。これに対しても作三身では、衆生の一身のうちに本有の三身が観じられるが、その際法身を色法、報身を心法、應身を色心不二としているのである。<sup>(81)</sup> そしてさらにこの心法や色法とむすびつけて、次のように法性と無明、煩惱即菩提、生死即涅槃が論じられている。

「夫法性者。從<sup>ニ</sup>無明一生。若有<sup>ニ</sup>無明<sup>ニ</sup>法性<sup>ニ</sup>心法不<sup>レ</sup>顯。有<sup>ニ</sup>法性<sup>ニ</sup>無明<sup>ニ</sup>色法不<sup>レ</sup>顯。煩惱即菩提。生死即涅槃談。始知衆生本來成仏說是山伏姿<sup>(82)</sup>」

ここでは法性と無明が表裏一体をなし、色心もそれと不可分である事が示されている。そして結局、煩惱即菩提、生死即涅槃は成仏した衆生の悟りの境地を示すものと抱えられてゐるのである。

そしてまたさらにつれを展開して

「修驗意方法阿字本不生法体安<sup>ニ</sup>住生死體<sup>ニ</sup>自不生不滅妙理顯也。」

念々煩惱即毗盧本覚智開覺云生死即涅槃煩惱即菩提也<sup>(83)</sup>

としている。すべての根源が阿字本不生の理にあるとし、あわせて念々の煩惱即毗盧本覚の智と開覺することが生死即涅槃、煩惱即菩提を意味するとしているのである。ところでこの阿字不生も

「(自性) 本源者自性清淨心也。自性清淨心者六<sup>(84)</sup>大不生阿字也。

六<sup>(84)</sup>大不生阿字者從<sup>(85)</sup>本無<sup>(86)</sup>起滅<sup>(87)</sup>。起滅者即<sup>(88)</sup>是妄心也」

というように自性清淨心とむすびつけられているのである。

さてこのように修験者が自性心のうちに観じた金胎一致、理智不二、無相三密、阿字本不生の理を見ると、その根底には、いずれにも清淨心が認められた。理智不二を本性清淨、無相三密を本来清淨、六<sup>(84)</sup>大不生の阿字を自性清淨心ととらえる見方がこれである。こう見てくると修験道の悟りは、自己の心底に「清淨心」をめざさせることにあるとも思えるのである。事実『修験心鑑鈔』には、

「大先達能修<sup>(89)</sup>行智慧而離<sup>(90)</sup>生死。自性清淨人。故為<sup>(91)</sup>菩薩<sup>(92)</sup>也」

というように、智慧の修行、すなわち戒定慧の三学のうちの慧の修行をつめば、最終的には、生死を離れ、自性清淨の境地に入り菩薩となるとといっているのである。

ところでこうした清淨感は神秘主義において、心の沈潜過程に応じてあらわれるものとしてきわめて重視されている。すなわち岸本英夫氏によると、神秘主義に見られる宗教意識

の本質は実在感、拡充感、清淨感である。この実在感は何か動かすべからざるものにふれたという意識、拡充感は請願・遵迎・内照・諦住の境地、清淨感は意識作用が純粹化していく傾向をさしている。この三者は、宗教意識のうちに内包されているが、特に心の純化過程の深まりを示す清淨感は神秘階梯をつらぬく原理であると共に、その終局の境地たる恒一の根底にひそむものとされている。<sup>(86)</sup>

こうしたことから考えるときに見たように理智不二、無相三密、阿字本不生の根底に自性清淨心があるとの教義上の説明も充分根拠があると思えるのである。

さて修行者は一度こうした神秘体験をへると、今度はそれをもとにしてこれ迄へてきた三学などの修行をかえり見るようになる。その結果これらに関して、不二や清淨感にもとづく新しい意味づけがなされていくのである。そこで最後にその代表的なものをあげて見ると、まず成仏迄の修行の基本をなす三学に関しては、

「修験所談<sup>(93)</sup>三学者。自性本有<sup>(94)</sup>三学故謂<sup>(95)</sup>無作。自性本来清淨<sup>(96)</sup>無垢無染。是為<sup>(97)</sup>戒<sup>(98)</sup>。自性本来寂靜無<sup>(99)</sup>動亂。是為<sup>(100)</sup>定<sup>(101)</sup>。自性本来明了無<sup>(102)</sup>疑心。是為<sup>(103)</sup>慧<sup>(104)</sup>」

ととかれている。ここでは三学を本有のものとし、本来清淨が戒、寂靜無動亂が定、明了無疑心を慧と説明しているのである。そしてさらにこのうちの戒については、修験道では本

有の戒体を説くとしたうえで、これについて、

「了<sup>(88)</sup>知我等三業本来畢竟不生。法性自爾，常無<sup>(89)</sup>動作。是名<sup>(90)</sup>本有戒体<sup>(91)</sup>」

と説明し、とくに三聚淨戒を例にとって、断惡の戒である撰律儀戒は中道と身、修善の攝善法戒は空と口、利他的饒益有

情戒は仮と意を示すというように、戒自体を三諦や三密の諸局面を示すものととらえているのである。

次に本小論では定に位置づけた十種所役に関しては、最初の床堅と正灌頂の二種を「生聖絶対形儀也。能所不二独立法身體性故也<sup>(92)</sup>」とし、他の八種の修行は「生仏相對」の修行としてこれと区別している。また慧の修行とむすびつくと思われる十界修行の四聖に関しては、声聞は「苦諦即法身、集諦即菩提、滅諦即涅槃、道諦即自性」、緣覚は「煩惱即菩提、業障即解脱、苦道即安樂」と観ずることをさすとしている。<sup>(93)</sup>また菩薩は無相六度すなわち一心のうちに方法を具足して、差別の相を見ないこと、最後の仏は行者の色身実相が常に毗盧遮那平等の智身であるというように、凡聖一如を示すと説明されている。このように四聖の修行では修行のそれぞれの段階がすべて不二の世界であるとしているのである。

以上のように修驗道の修行においては絶対不二の境地、さらにはこうした境地をもたらすと共にその根底にひそむ清浄感をえる事が目的とされている。そしてこうした境地をえたあ

とは、その境地をただ単に文章のみでなく、字義、衣体や儀礼をしてだてとして説明しているのである。またさらにこうした体験にてらして、それをもたらした三学そのものすらも絶対不二を示すものとして把えなおされているのである。

#### 注

(1) 宮家準『修驗道——山伏の歴史と思想』教育社 昭和五三年 参照

(2) 宮家準『山伏——その行動と組織』評論社 昭和四八年 参照

(3) 生神の信仰に関しては宮田登『生神信仰』塙書房 昭和四年 参照

(4) 死体処理、生体処理といふ考え方については、山折哲雄「死と生の共同体——死体処理と生体処理の論理と心情」田丸徳

善他編『日本人の宗教Ⅰ』校成出版社 昭和四七年所収参考

(5) 日本ミイラ研究グループ編『日本ミイラの研究』平凡社 昭和四四年参照

(6) 三学はその発生順序から云えば、まず、戒が、次に定、最後に慧が生じたとされている。また原始仏教の修道法である八正道を三学ともすびつけ、正見・正思惟を慧、正語・正業・正命を戒、正精進を三学共通、正念・正定を定とするとの充當がなされている（水野弘元『仏教要語の基礎知識』春秋社 一八七頁）。なお『修驗宗法具秘決精註』巻上には八正道の簡単な紹介がなされている（修疏一五一七頁）。

(7) 『修驗最勝慧印三昧耶法玄深口決』（修疏I 一一八頁）

もつとも後述するようにその内容から見れば、慧印法流は慧学に重点が置かれている。

(8) 『修驗心鑑鈔』修疏 I 三六二頁 なお本書の同じ箇所に

「因ニ此貪嗔癡起ニ殺盜婬堕ニ欲色無色ニ三惡、故仏設ニ戒定慧之三學ニ教誨」と述べられている。

(9) 五来重「修驗道の修行と原始回帰思想」講座『日本思想 I』

東大出版会 昭和五八年 五三一五四頁

(10) 「修驗得度作法」修疏 I 一七三頁。なお『修驗慧印三昧耶引導法』に付記されている「修驗得度作法」では五戒として、殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒の五つがあげられているが、これを破った時の陀羅尼は記されていない(修疏 I、一〇九一一〇頁)。

(11) 『大峰修行灌頂式』修疏 II 五四頁

(12) 『大峰修行灌頂式』修疏 II 五六一五七頁

(13) 『葛城修行灌頂式』修疏 II 六〇一六二頁

(14) 『峰中壁書事』「山号峰中新客等制法事定」『三峰相承法則密記』修疏 II 四六九頁

(15) 『修驗十八箇条警策』修疏 I 四三三一四三四頁

(16) 『制徒十条』『彦山修驗最秘印信口決集』卷下 修疏 II 五五五頁

(17) 修驗道の修行がこのように窟内の禪定を中心的なものとすることはつとに柳田国男によつて指摘されている(柳田国男「毛坊主考」『定本柳田国男集』第九卷 四〇三一四〇九頁)。

また各地の窟修行については五来重氏が数多くの事例を報告されている(五来重、「修驗道の諸相—窟作り一一五」ア

一ガマ、三〇一四五)。

(18) 最近では大峰山中笙の窟に百ヶ日籠つて修行した吉野山喜

藏院住職中井教禪師(昭和五六夏)、求菩提山で密閉した吉祥窟に七日間こもつた山田竜真師(昭和五七年四月四日—十一日)、京都の三室戸寺裏の窟に一週間こもつた二人の女性行者などの例がある。

(19) 『修驗學則』修疏 III 九一頁

(20) 『役談十義』修疏 I 五八七頁

(21) 『五停心觀』『修練秘要義』卷 II 修疏 I 六二五頁

(22) 『三峰相承法則密記』卷上 修疏 II 四五八頁。なお『修驗頓覺速証集』には「峰中先達」と記されている(修疏 II、四三三頁)。いずれにしろ、この先達が峰入修行全体をとりしきつていたと考えられるのである。なお現在の羽黒山秋の峰などではこの他に抖擗の案内の役割を勤める駢の先達が設けられている。

(23) 『修驗修要秘決集』修疏 II 三九三頁

(24) 『三峰相承法則密記』修疏 II 四八五頁

(25) 『修驗修要秘決集』修疏 II 三八九一三九七頁

(26) 十界修行に関しては宮家準「籠山修行の思想——修驗道の十界修行を中心として」『伝教大師研究』早稻田大学出版部昭和五五年参照

(27) 五来重氏は、修驗道の峰入修行は本来こうした懺悔滅罪を目的とするものであつたとされている(五来重「庶民信仰における滅罪の論理」『思想』昭和五一年 第四号)。

(28) 六波羅蜜のそれぞれに次のように峰中の修行や法具を充當

するところみなされている。この充当は六波羅蜜を十界の一つの菩薩行に位置づけてのものというより、むしろ、峰入修行全体を六道の苦を超克する六波羅蜜の修行ととらえて、このそれぞれに峰中の諸儀礼や法具を位置づけたものと考えることが出来る。ただしその充当の根拠は定かでない。

第四表 六波羅蜜と峰入修行

六波羅蜜	修行	法具など		六道への充当	
		關伽	關伽水	餓鬼	地獄
布施(檀那)	抖擗	小打木			
持戒(尸羅)	小木	華鬘			
忍辱(羼提)	採灯	柴灯			
精進(毘梨耶)	手一合	木原(柱源)			
禪定(禪那)		手続(燈明)			
智慧(般若)		畜生			
出典	『三十三通記』 二九頁	『三峰相承法則密記』 修疏II 四 九三頁	『三十三通記』 修疏II 四二 九頁	『修驗心鑑鈔』卷上 修疏I 三五九頁	『修驗心鑑鈔』卷上 修疏I 三五六頁
	『三十三通記』 修疏II 四 八頁	『修驗頓覺速証集』卷上 修疏II 四三七—四三八頁	『五人先達五智配当事』『三峰相承法則密記』修疏II 四五	『修驗心鑑鈔』卷上 修疏I 三五九頁	『修驗心鑑鈔』卷上 修疏I 三五六頁

『弘法大師御遠忌記念論集』成田山仏教研究所、昭和五九年参考

(34) 『大峰界会満行自在次第』修疏I 一六六一一六九頁

(35) 『修驗極印灌頂法』修疏I 二九頁

(36) 上記の灌頂については『修驗極印灌頂法』修疏I 二一

二九頁。『靈異相承慧印儀軌』修疏I 七一一八二頁参考

(37) 『修驗心鑑鈔』卷上 修疏I 三六〇頁

(38) 『修驗心鑑鈔』卷上 修疏I 三五九頁

(39) 『修驗心鑑鈔』卷上 修疏 三五八—三五九頁

(40) 『修驗頓覺速証集』卷上 修疏II 四三七—四三八頁

(41) 『五人先達五智配当事』『三峰相承法則密記』修疏II 四五

(42) 『柴灯護摩次第』修疏I 一九頁

(43) 登拝者は密閉され暗闇にされた塔に入れられ、須弥壇の周囲を「吉野なる深山の奥のかくれ塔、本来空のすみかなりけり、オンアビラウンケンソワカ、南無神変大菩薩」ととなえながら回らせられる。その途中、突然、鐘をならしておどす儀礼である。私はこれを氣を抜く儀礼を解している。

(44) 五来重『山の宗教』修驗道、淡交社、昭和四十五年 一五八頁。もっとも葬儀の四門は発心門、修行門、菩提門、涅槃門の四つである（『修驗道無常用集』卷上 修疏I 一九三頁）。周知のように等覚、妙覺は菩薩四十二位の最後の二位である。それ故四門の修行には死の象徴とあわせて、成仏の完成を示す意味もこめられていると思えるのである。

(45) 『峰中秘伝』修疏I 五七三—五七四頁の記述をもとにし

(29) こうした内容からすると、四聖の修行は見方によつては仏智を得る慧の修行とも見える事が出来よう。

(30) 『修驗修要秘決集』修疏II 三八八—三八九頁

(31) 『三峰相承法則密記』修疏II 四八〇—四八六頁。『峰中十種修行作法』修疏I 二六二一一七〇頁。

(32) 『峰中灌頂本軌』修疏I 三九六頁

(33) 慧印法流成立の経緯に関しては、宮家準「聖宝伝説考」

て、本表を作製した。

- (46) これは陰門の間違いとも思われるが定かでない。また何故九ヶ月に九穴を充當するのかも定かではない。ちなみに、山上ヶ岳表行場の鐘掛の行場には九穴の藏王がまつられている。

(47) 『峰中秘伝』修疏 I 五七一一五七二頁。なおこの同じ箇所で死に関して「死スル時ハ本覚真如ノ大地ニ帰シテ阿字本不生ノ理ヲ証スベシ」との説明がなされている。

(48) 『修驗宗法具秘決精註』卷下、修疏 I 五三〇一五三二頁。

なお五十二位の場合には、この前に十信が設けられている。このそれぞれの説明は天台教学でとくものとほぼ同じもの故その説明は割愛することにしたい。

(49) 『修驗宗法具秘決精註』卷下 修疏 I 五三二頁

(50) 『彦山修驗道秘決灌頂卷』修疏 II 五六八頁

(51) 『入峰修行三祇事』『修驗修要秘決集』修疏 II 四〇五頁。なお同様の切紙が『彦山修驗秘決印信口決集』修疏 II 五一九頁『本山修驗深秘印信集』修疏 II 六四五頁にも収録されている。

(52) 『彦山修驗道秘決灌頂卷』修疏 II 五六七頁

(53) 『三峰相承法則密記』卷上 修疏 II 四七四頁

(54) 岸本英夫『宗教神秘主義——ガの思想と心理』大明堂昭和三三年 一六七一—一六九頁

(55) 修驗道の教義書ではこう主張しているが、その内容からすると、即身成仏は理具の成仏・正因、即身即仏は加持の成仏・了因、即身即身は顯得の成仏・縁因とほぼ対応すると考え

る事が出来る。

- (56) 『修驗修要秘決集』卷上、修疏 II 三七九頁。なおほぼ同じ切紙が『修驗三十三通記』にも収録されている(修疏 II、四三〇頁)。

(57) 『修驗三十三通記』修疏 II 四一〇頁

(58) 『柱源神法護摩軌』修疏 II 六頁。この不動明王との一体觀は「觀自身即不動心無二無別也」(『修驗道不動秘密悉地法』『大聖不動明王深秘修法集』修疏 I 二一五頁)とも觀

じられている。

(59) 『彦山修驗最秘印信口決集』上 修疏 II 五三三頁

(60) 『修驗三十三通記』修疏 II 四二一頁

(61) 『修驗三十三通記』修疏 II 四二四頁。なおこうした無作三身をとく他に「夫以<sup>ル</sup>即身成仏義者。既顯<sup>ル</sup>法身<sup>ム</sup>德<sup>ム</sup>。入胎<sup>ム</sup>上求菩提也。又顯<sup>ル</sup>出胎<sup>ム</sup>下化衆生。願<sup>ル</sup>出家受戒<sup>ム</sup>是報身<sup>ム</sup>德<sup>ム</sup>也。現<sup>ル</sup>忿怒<sup>ム</sup>相<sup>ム</sup>降<sup>ム</sup>伏惡魔<sup>ム</sup>是應身<sup>ム</sup>德<sup>ム</sup>也。如<sup>ル</sup>是依<sup>ル</sup>三身<sup>ム</sup>德行<sup>ム</sup>全無<sup>ル</sup>勝劣<sup>ム</sup>」(『彦山修驗道秘決灌頂卷』修疏 II 五六二頁)と

いうように峰入を法身 受戒を報身 惡魔降伏を應身というよう修驗者の実際の活動と結びつけて三身をとくとらえ方も認められる。

(62) 『修驗三十三通記』修疏 II 四二〇頁

(63) 『修驗修要秘決集』修疏 II 三七七頁

(64) 『彦山修驗秘決灌頂卷』修疏 II 五五六頁

(65) 田村芳朗「日本思想史における本覚思想」現代思想一〇の一一二 青土社 一九〇頁

識所<sub>ニ</sub>識。非<sub>ニ</sub>言所<sub>ニ</sub>言」（『三十三通記』修疏II 四一七頁）、「修驗立義不<sub>ニ</sub>仮<sub>ニ</sub>仏教<sub>ニ</sub>不<sub>ニ</sub>立<sub>ニ</sub>文字<sub>ニ</sub>、唯以心伝<sub>ニ</sub>心」（『修要秘決集』修疏II 三七八頁、「（修驗道者）顕密不<sub>ニ</sub>難思機絕立行也。離<sub>ニ</sub>藏<sub>ニ</sub>教<sub>ニ</sub>直<sub>ニ</sub>示<sub>ニ</sub>仏心正頭<sub>ニ</sub>、是<sub>ニ</sub>名<sub>ニ</sub>以心伝心」）（「修要秘決集」修疏II 三七九頁）などと説明している。

(67) 『修驗修要秘決集』修疏II 三八二一三八五頁。『山伏二字義』修疏II 二八一四一頁。なお宮家準「山伏字義考」小口偉一教授古稀記念論文集所収参照

(68) 『彦山修驗道秘決灌頂卷』修疏II 五五八頁

(69) 「三身山伏之事」『修驗修要秘決集』修疏II 三八五頁。なおこれとはほぼ同様の切紙が『修驗三十三通記』にも収録されている。

(70) 『修驗修要秘決集』修疏II 四〇四一四〇五頁

(71) 衣体の説明は主として「衣体十二通」『修驗修要秘決集』上 修疏II 三六七—三七七頁による。なお衣体の象徴的意味に関する詳細は、宮家準「修驗道の衣体に見られるシンボリズム」成田山仏教研究所紀要 第二号所収参照

(72) 衣体の意味と共に、法螺・念珠・錫杖の音が行者の成仏（転凡入聖）、鈴（鈴掛けつけた）・法螺が法身の説法を示すというように、音についても象徴的意味づけがこころみられている。

(73) 『修驗修要秘決集』修疏II 三八八頁

(74) 田村芳朗「天台本覚思想概説」『天台本覚論』日本思想大系九所収、五一四一五一五頁

(75) 『修練秘要義』修疏I 六九五—六九六頁

(76) 『修驗修要秘決集』修疏II 三七七頁。なお『大峰界会万行自在次第』に収録されている切紙「當道不<sub>ニ</sub>事」には、「理智竝對時。金有<sub>ニ</sub>理智之德。胎有<sub>ニ</sub>理智之用。又立<sub>ニ</sub>理智相對上<sub>ニ</sub>也。皆不<sub>ニ</sub>取<sub>ニ</sub>之。今失<sub>ニ</sub>理智之道。有<sub>ニ</sub>一自性体。是名<sub>ニ</sub>不<sub>ニ</sub>也」（修疏I 一六五頁）とある。ここでも「一自性体」が不<sub>ニ</sub>と見えられているのである。

(77) 『理智不<sub>ニ</sub>界会礼讚』修疏I 六八頁

(78) 『峰中秘伝』修疏I 五七四頁

(79) 「峰中灌頂無相三密事」『彦山峰中灌頂密藏』修疏II 七七頁

(80) 「三諦一念事」『彦山修驗秘決印信口決集』修疏II 五一八頁。この他 修生の六大依身を一身とし、仏体（床堅）・衣服（十二道具）・飲食（柱源）を三觀とし、修行者が法衣を着、床堅、柱源を修行することを一身三觀とする修驗独自の思想も認められる。（「修驗道一身三觀事」『本山修驗深秘印信集』修疏II 六三九頁）

(81) 「三身即一事」『彦山修驗秘決印信口決集』修疏II 五一八頁

(82) 『彦山修驗道秘決灌頂卷』修疏II 五五七頁

(83) 『修驗頓覓速証集』修疏II 四三五頁

(84) 『修驗修要秘決集』修疏II 三七九頁。修驗道において自性心の根源に阿字を置くことは、「皆人は阿字より出て 阿字に入り阿字こそ本の栖なりけり」「阿字の身の阿字の里より立ち出て、又立ちかえる阿字の古郷」（『峰中秘伝』修疏I 五五九頁）などの神歌からも知る事が出来る。

(85) 『修驗心鑑鈔』 修疏 I 三五八頁

(86) 岸本英夫『信仰と修行の心理』二六三—二六五頁 溪声社

(87) 『修驗頓覺速証集』卷上 修疏 II 四三二頁

(88) 『修驗頓覺速証集』卷上 修疏 II 四三一頁

(89) 『修驗頓覺速証集』卷上 修疏 II 四三一頁

(90) 『峰中灌頂本軌』修疏 I 三九六頁

(91) 『修驗修要秘決集』修疏 II 三八八—三八九頁

(92) 「無相六度之事」『修驗三十三通記』修疏 II 四二六頁。なおこの切紙には、これとあわせて無相六度のそれぞれについて、「一布施者。自性靈光照三万機。自他平等應用遍是也。二持戒者。仏性從本清淨也。身心相應不見邪念正戒相一是也。三忍辱者。仏性無為不預我人相一是也。四精進者。仏性從本備衆德一得三万行成就一是也。五禪定者。仏性真常離動靜諸相一是也。六智慧者。仏性一明凡聖遍照是也」との説明がこころみられている。

(93) 『修驗修要秘決集』修疏 II 三八九頁

付記 本稿は昭和五九年一月十二日に駒沢大学仏教学部主催の講演会で行なった講演草稿に加筆して注を付したものである。